

《論文》

ライフセーバー養成課程における コミュニケーション指導パイロットスタディ —ボードレスキューに関するミニシナリオ教材の作成—

立川 和美, 稲垣 裕美, 小粥 智浩, 小峯 力

Teaching communication skill in the Training for the Lifesaver:

Making of mini-scenario teaching materials about the Board Rescue

Kazumi TACHIKAWA, Yumi INAGAKI, Tomohiro OGAI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセーバー, コミュニケーション, ボードレスキュー

Keywords: Lifesavers, Communication, Board Rescue

1. はじめに：ライフセーバーと コミュニケーション

ライフセーバーは、いわゆる救命活動の他に、海水浴場やプールといった水辺の事故防止のためのパトロールや安全教育活動、環境保全活動も行っており、その活動内容は極めて広い^(註1)。特に事故防止に向けては、海水浴客に注意を促す「声かけ」が重要とされる。また夏季の海浜での救助活動では、クラゲに刺された人や、熱中症になった人への応急手当が最も多いが、海水浴場の禁止事項の周知も不可欠であり、コミュニケーションはライフセーバーの活動の中で重要な位置を占めている。

一方、コミュニケーションに関する研究は、言語学の領域のみならず、近年では医療や福祉、教育などの分野で学際的に行われており、ス

ポーツ科学でも進められている。それは具体的には、指導者と選手、選手間に見られるコミュニケーションについて、その情報伝達の方法や内容に関する議論である。特に先行研究では、表情や姿勢、ジェスチャー、接触行動などのボディランゲージを用いた非言語コミュニケーションが取り上げられることが多い。

ライフセーバーのコミュニケーションスキルとしては、自分の考えを明確に伝える発信力、能動的に正確に理解する受信力の両方が求められることに注意したい。またライフセービングの活動はチームプレイも多いため、メンバー間の協調や共感といった調和や、コミュニケーションは、チーム内で信頼関係を確立したり、雰囲気づくりにつながったりすることに関わってくる。

既にスポーツ科学の研究において、コミュニ

ケーション力は競技力と密接に関係していることが明らかにされているが、ライフセーバー育成の課程において、コミュニケーション技術に特化した練習は整理されていないのが現状である。特にライフセーバーは、他のスポーツとは異なり、コミュニケーションを行う対象が多様であり、それがレスキュー活動に直結することから、こうした能力は不可欠だといえる。よって、その育成において体系的にコミュニケーション能力を向上させるプログラムを早急に開発する必要がある。

そこで以下、本稿では、こうしたコミュニケーション能力を育成するためのパイロット教材の作成に取り組んでみたい。

2. 先行研究概観

2. 1. ライフセービングに関する海外の先行研究

ライフセービングの歴史は古く、オーストラリアやイギリスなどの欧米諸国では、その活動も活発である。そこで本節では、そうした海外におけるライフセービングに関する先行研究をいくつか示しておきたい。

Portis (1998) は、体育の授業でライフセービングの知識を獲得することをテーマに、「服に火がついた時」にどう対処するかという方法の学習について取り上げている。ここでは、“Stop, Drop and Roll” という方法が示され、“You have to try it and practice it yourself until it becomes second-nature.” という助言に加えて、“The physical education classroom can become an effective place to learn “Stop, Drop and Roll”. Once stop, drop and roll has been mastered, revisit it throughout the

year.”として、体育の授業で学ぶことの有効性と反復学習との重要性が指摘されている。

次にKandakai & Keith (1999) をとりあげる。これは、ミッドウエスタン大学の学部学生214名を対象にthe American Red Cross (ARC) が行った8週間(12コマ)の緊急時対処に関するコースの前後での、ライフセービングスキルの行使や効果に関する意識を測定したものである^(注2)。ここでは、以下のような結果が見られたとしている。

Results show that the course was highly effective in improving students' perceived self-efficacy of performing life saving skills. The course was also effective in reducing the impact of barriers for students' willingness to perform lifesaving skills.

最後に、ライフセーバーのスキルについての研究を取り上げる。Page. et al. (2011)は、経験豊富なライフガードとそうでないライフガードの被救助者発見時の視覚パタンを調査したもので、

Experienced lifeguards were five times more likely to detect the drowning individual than inexperienced lifeguards. There were no significant differences between the visual search patterns of the groups between 2 and 10 min.

という結果を示している。

以上、本節では、海外のライフセービングに関する先行研究についてまとめた。次節では、スポーツとコミュニケーションに関するごく近

年の研究を見てみたい。

2. 2. スポーツとコミュニケーションに関する先行研究

まず、学校教育の中でダンスを通してコミュニケーション能力を高めようとする高橋他(2016)では、コミュニケーション能力を、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互理解を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話(情報や価値観を共有していない相手との言葉による交流)をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深めあいつつ、合意形成・課題解決する能力」(文部科学省コミュニケーション教育推進会議審議経過報告(2012)「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために—『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取り組みから」)ととらえている。

また東海林(2011)は、自らのソフトボールの指導者としての経験をもとに、指導者が選手に想いを伝える方法について、「直接口頭で伝える」、「選手の周囲の人に間接的に伝える」、「掲示板を利用して張りだして伝える(ママ)」、「日誌に思いを書き込み伝える」といった実践を挙げた上で、「選手とコミュニケーションを図るためにもっとも重要な要素は、自分自身のなかにあるオンとオフとの定義や考え方がかなり影響をしていた」としている。

島崎(2015)は、スポーツ指導者の発する非言語コミュニケーションに関する研究である。ここでは、「指導者教本や指導者資格認定制度の発展」が「スポーツ指導全体の質の向上」につながった一方、「指導者教本に記載されてい

る内容を現場で伝える一辺倒の指導になってしまい、競技種目に関する本質的な理解の欠如や、多様化する個々の選手への対応不足といった問題点」も発生しているため、「スポーツ指導者のコミュニケーション能力を改善する取り組みは、我が国のスポーツ分野の発展において重要な課題」だとしている。そして、スポーツ指導者の用いる非言語コミュニケーションに対して選手が抱く印象と使用頻度を評価する尺度の構成、選手の評価によるスポーツ指導者の非言語コミュニケーション使用頻度がコーチングに対する評価に与える影響を調査している^(注3)。さらに非言語コミュニケーションは、言語コミュニケーションとの相互作用により、コーチングへより高い影響力を有することも明らかにしている。

Grahn(2014)は、水泳の若手トップアスリートに向けたコーチングの談話に関する研究であるが、ここでは、コーチの用いる表現の多様性を以下のように指摘している。

The coach described the educational process using different words/metaphors, including 'build', 'create understanding', 'guide' and 'educate'. Drawing on this repertoire the coach is the active subject, whose mission is to generate the 'building' or the 'guidance'.

さらに、コーチと選手がチームとなるためにもコミュニケーションは重要であると指摘されている。

An important part of becoming a team was communication... The coach

explained that it is important for him and his athletes to get to know each other through communication and to have good exchanges.

以上、本節では、スポーツとコミュニケーションを取り上げた近年の研究をまとめたが、いずれの研究でもコミュニケーション能力の重要性が指摘されていることが明らかになった。

2. 3. コミュニケーション能力育成のための教材例

コミュニケーション能力育成のための教材は、主に言語教育の領域が中心だが、角田（2013）のように、東日本大震災以降注目されてきた「リスク・コミュニケーション」を取り上げた研究も近年増えている。角田（2013）では、リスク・コミュニケーション教育教材開発のガイドライン（ver1.1）が示されているが、「科学観を伝える教材であること」、「シチズンシップを育てる教材であること」、「思考スキルを育てる教材であること」、「社会とリスクの関係について学ぶ教材であること」の4点が挙げられている。

また、永井（2013）のように、医療現場におけるコミュニケーションを取り上げた研究もあり、ここでは、看護師が勤務交代時に行う引き継ぎ談話である「申し送り」のディスコースが分析されている。永井（2013）によると、「申し送り」では、「時間制限のある中で担当患者に関する情報を口頭でやりとりするため、情報伝達の正確さと迅速さが要求されるが、日本人向け看護コミュニケーション教材では具体的な表現についての記述が見られず、会話の内容に関する抽象的な説明が多いとしている。更に、外国人向けの看護コミュニケーション教材につ

いては、近年、EPAにより外国人看護師は増加しているにもかかわらず、教材が不十分な状態にあるといった問題を指摘している。

日本語教育の分野ではコミュニケーションに着目した教科書が多いが、本稿では、西谷（2014）の提案するビジネスコミュニケーション教材を見てみたい。ここでは、外国人と日本人とが一緒に働くにあたり、「仕事の背景理解と指示」、「仕事の厳しさ」、「日本語のスピーチレベル」、「日本語教育への期待」、「相互理解の可能性」といった5つの阻害要因が指摘されている。特に「スピーチレベル」は言語的要素が強く、外国人は適切な敬語表現、婉曲表現、あいづちの使用などが困難である一方、日本人は外国人に丁寧な言葉で話してほしい、要求されたことを正確に伝えてほしいと感じているといった問題が存在しているという。

この上で、トラブル事例を用いて「なぜ日本人と外国人がそのように考え」たり行動したりするのか、「外国人はどうすればよいかを考えさせる」教材が提示されている。具体的には、事例を読んで「取るべき行動を選択し」、「実際に使える日本語の表現を学び」、「どのような指示が適切かを教え」、「日本人社員の価値観、文化背景のモデルを提示する」という流れで、指示のスタイルの根底にあるものを理解して、外国人社員に自分の文化との違いを認識させることが目指されている^(注4)。

以上、本節ではコミュニケーション能力を向上させるための教材研究や教材の例をいくつか概観した。次章では、ボードレスキューを用いたコミュニケーション能力向上のためのミニシナリオ作成を行いたい。

3. ボードレスキューを活用した教材 (ミニシナリオ)の作成

3. 1. ボードレスキューの流れと注意点

以下、本章では、日本ライフセービング協会(2008)をもとに、ボードレスキューのミニシナリオレスキュー教材を作成していく。

ライフセービングのコミュニケーションでは、パトロールにおけるコミュニケーションとして、「天候や周囲の雑音によってライフセーバー同士の声による伝達が困難」な場合、「海水浴場内放送」、「無線」、「拡声器」、「ホイッスル」、「シグナルフラッグ」、「携帯電話」などを用いる^(注5)。インフォメーションについては、「海水浴場のルールや海の状況といった情報を利用者が事前に理解することは、海水浴場の安全管理を行うにあたり有効な方法」で、海浜利用者に対する情報提供手段としては「インフォメーションボード」、「標識」、「遊泳条件フラッグ」、「エリアフラッグ」などがある。

また溺者を早期発見するには、「溺れのサインや周りの遊泳者の行動を読み取ることで溺者を迅速・的確に発見」できるという。レスキューの方法は、以下のように分類できる^(注6)。

- ・水に入らない・泳がない：
 - トーク・リーチ・スロー
- ・水に入る・泳がない：ウエイド・ロウ
- ・水に入る・泳ぐ：スイム・トウ

上記のレスキューの方法の選択で最も重要なのは、レスキュー自身の安全確保であり、レスキューには危険を伴うことを理解した上で、「迅速かつ確実な方法で救助を行う必要がある」という。

さらに溺水事故は、原因を一つに特定することが難しいため、ライフセーバーは常に「海水

浴場全体を監視できるように心がけなければ」ならず、「早期発見には溺者に関する知識に加えて、事故に至るまでの状況を適切に判断するための経験も必要になる」と指摘されている。

3. 2. パイロット教材例：ミニシナリオ レスキュー(ボードレスキュー)

本節では、ライフセーバー養成課程に用いるコミュニケーション能力向上のためのパイロット教材を提案したい。

〈教材例1〉

以下の内容についてシートを作成し、適宜ディスカッションを行いながら、ボードレスキューの特性を理解する。

*ボードレスキューの特性(長所)

ボードレスキューは、レスキューボードを用いたレスキューの基本である。

(質問)以下の文の()を埋めなさい。
ボードレスキューのメリット

レスキューアが溺者の所まで到達するまでの時間が(短い)。

レスキューアの視線が高く、(遠方にいる溺者)も見えやすい。

大きな浮力があり、海上で(たくさんの)人につかまってもらえることができる。

溺者をボードの上に乗せることができ、溺者に(安心感)を与えることができる。

溺者を連れて浜(岸)まで戻るのに、時間が(かからず)安全である。

(質問)これらのメリットを救助活動に生かせる状況には、以下の場合が考えられます。それぞれの理由を答えなさい。

- ・マズレスキューが必要な場合
(解答例)大きな浮力を持つレスキュー

ボードは、一度に多くの溺者につかまってもらい、浮かせる事が出来るため有効である。

- ・大きな波や潮の流れが強い場合

(解答例) リップカレント等を利用することによって、溺者へ容易に接近でき、速やかに浜(岸)へつれ戻すことができる。

〈教材例 2〉

教材例 1 での学習後、適宜、指導者による質疑応答や説明を交えながら、シミュレーショントレーニング形式等で以下のシナリオレスキューを行う。それぞれの項目に関してレスキューアとして必要な行動、そうした行動をとる理由、声かけの内容等を確認しながら進めていく。

* ボードレスキューの流れと発話

状況設定：離岸流に流された遊泳者(男性20代)は全力で岸に戻ろうと泳いでいた。しかし、その場所から前進せず(岸に戻れず)、むしろ沖へ流されてしまい、やがてパニックに陥り、遊泳者は溺れた。さらに近くにはもう一名(男性20代)、遊泳者がいるが、こちらは自力で岸に向かって泳いできている。二人の距離は離れていっている。

レスキューア(2名)：レスキューア、レスキューアB(浜で待機)

* シナリオレスキューの内容

① レスキューボードの設置

常に使用できる状態。使用頻度が高いと予想

される場所に目立つように置く。デッキ面には滑り止めのためのワックスを塗る。

A「レスキューボードはここに置いてあります。ワックスの確認をお願いします。」

② 溺者の発見

(質問) 溺れのサインの例をできるだけ挙げなさい^(注7)。

(解答例) ・後ろから波をかぶり前髪が顔にかかりながらも浜に向かおうとしている動作。

・浮いたり沈んだりしながら水面に顔を出して空気を吸おうとしている動作。

・かろうじて水をかいて、息を吸おうと水面をもがくような動作。

・頭が後ろに反り、手で梯子を登るような動作。

・顔を水面にだそうと両手で水を叩くような動作。

レスキューアは溺者を発見したら、決して見失ってはならない。レスキューボードのストラップを持ち、溺者を見ながら最も近い所まで陸上を走る。これは溺者の所まで最も早く到着するためである。

A「レスキュー・レスキュー・レスキュー。こちら、第一タワー。第一タワー正面の沖へ50mのところ男性2名の溺者を発見しました。1名は軽溺で今にも沈みそうです。もう1名は自力で浜に向かって泳いでいますが、泳ぎはうまくありません。〇〇(Aの氏名)はボードで2名のマスレスキューに向かいます。応援をお願いします。どうぞ。」

本部「こちら本部。了解しました。自力で浜に戻ろうとしている男性は、こちらからの応援のレスキューボードに救助させます。応援△△(Bの氏名)が行きますので、○○は軽溺に直ちに向かってください。」

③ボードで接近・観察

溺者を見失わないようにパドリングを続け、溺者に浜側から接近しながら声をかける。レスキューアーは接近しながら溺者の様子を浜側から観察する。

(質問) 海側から溺者に接近してはいけない理由はなぜですか。

(解答例) レスキューアーが波に巻かれボードを溺者にぶつけてしまう危険性があるから。

④声かけ〈意識がある溺者(自力でボードの上に乗ることができる)に対して〉

溺者や海の様子に注意しながら、浜側から溺者に近づく。声の届く範囲になったら、溺者に声をかける。ボードのノーズが溺者に届いた所でいったん止まり、溺者の状態を観察しながら、引き続き声をかける。

(質問) どうして声かけを続けて行う必要があるのですか。

(解答例) 溺者を落ち着かせるため。溺者を励ますため。

A「大丈夫ですか?今すぐに助けますので落ちついてください。もう大丈夫ですよ」

A「ゆっくりと呼吸してください、もう大丈夫ですよ。こちらまで泳いでこれますか?」

A「私が今、ボードで近づきますので、近くまで来たら、ボードの上に腹ばいになって乗って

下さいね」

⑤確保1 (ボードを差し出す)

レスキューアーは、ボードのやや後ろ側にまたがる。レスキューアーは引き続き溺者とコミュニケーションをとり、ボードのデッキにあるストラップをしっかりとつかむように声をかける。その後、溺者よりも浜側の位置を維持しながら、ボードのノーズを浜に向ける。

A「あわてないでくださいね。大丈夫です。まず、私が乗っているボードの上にあるひも(ストラップ)をしっかりとつかんでください。」

⑥確保2 (ボードに乗せる)

レスキューアーは溺者に対し、ノーズ側に頭、テール側に足が来るように腹ばいの体勢でボードに乗るように声をかける。溺者がボードに乗る際には、ボード上にまたがりながら、溺者の脚を引き上げるサポートを行う。溺者がボードに腹ばいの状態で乗ったら、レスキューアーは溺者の足の間にうつぶせの状態です。

A「私が乗っているボードの前方に頭、後ろ側に足が来るように腹ばいでボードに乗ってください。」

A「ゆっくりでいいですよ。私がお手伝いします。足を持ちますからゆっくりと上がってきてください。」

A「乗ったらボードにお腹をつけて腹ばいでうつぶせに寝る姿勢をとってください。」

⑦浜へ戻る (パドリング)

レスキューアーは、溺者や海の様子を常に確認しバランスをとりながら、パドリングで浜に向

かう。溺者がパドリングできる状態であれば、コミュニケーションをとりながらともにパドリングを行う。

A「もう大丈夫ですよ。これから浜に戻りますね。」

A「私が腕で水をかいて進みますが、一緒にかけますか？」

溺者「足がつってしまっていますが、腕は大丈夫です。一緒にかけます」

A「そうですか。ではこのようにかきます。私が後ろからあなたのタイミングに合わせて手をかきますから、無理ないペースでかいてください。」

A「できますか。大丈夫そうですか。そうそう、上手です。では一緒に浜に向かいましょう。」

⑧途中で大きな波やブレイクポイントがある場合

溺者に対して、ボードのテール側の手で奥のストラップ、ノーズ側の手で手前のストラップを握るように指示する。(自力でうまくつかめない時は)溺者の両脇の下からレスキューアの両腕を通し、溺者の手の上からレスキューアの手を重ねて同じストラップを一緒に握る。

A「大きな波が来ましたが大丈夫ですよ。ストラップをしっかりと握ってくださいね。握れますか？」

溺者「はい、握れます。」

A「離さないで握っていてください。私がこぎ続けますので大丈夫です。」

⑨ウエイド

波打ち際に近づき、安全水域(水深)まで戻ってきたら、レスキューアはボードから降り、

ボードの脇に立って両手でストラップと溺者の足首を一緒に持つ。ボードと溺者を一緒に確保したまま、浜に向かって押す。なお、水深が浅くなり、ボードが進まなくなったら溺者に安全を確保しながら降りてもらうように声をかける。

A「浜につきました。もう足が立つくらいの浅瀬ですので、降りても大丈夫ですよ。」

A「一人で降りられますか？お手伝いしましょうか。」

溺者「降りられるんですが、歩けないと思います。足がつってしまって、それと疲れました。」

A「そうですね。大丈夫です、私がお手伝いして一緒に支えながら歩いていきます。それで大丈夫そうですか？」

溺者「それなら大丈夫かと思います。すみません。」

⑩ドラッグ準備

ボードを押しても進まない深さになったら、レスキューアは溺者を抱えて(ドラッグして)安全な場所まで移動する。自力移動が困難な場合は、溺者をうつぶせにしたまま、背中側から両脇を深く抱え、身体を反転させてボードからおろし、ワンマンドラッグ等を行う。このとき、溺者もレスキューアも沖を見ている態勢になり、溺者のお尻が砂浜につき、長座をしているような姿勢になる。

(質問)ドラッグ(搬送)の5つのルールとは、何ですか。

(解答例)

- 1 現状(救助や手当が終了し、運搬を始めてよいか?)
- 2 目的地(どの安全な場所に運ぶか?)
- 3 ルート(安全な搬送ルートを確認し、

何処へ運ぶか?)

4 運び方 (どのように (運び方, 運ぶ人数, 器具の有無など) 運ぶか?)

5 引き渡し先 (救急車の要請はしているか?)

(ここで応援のレスキューーBが待機している)

B 「Aさん。Bが応援に来ました。」

A 「ありがとう。」

A 「(溺者に対して) 足は大丈夫ですか? もし歩けないようでしたら, 私たちがあなたを持ち上げて運びますので, 歩けないようでしたら, 言ってください」

溺者 「すみません, やっぱり立って歩けないです」

A 「わかりました。それでは私たち二人があなたを持ち上げて運びますね。それでは, 向きを変えてもらいます。ボードの上に座ることはできますか。」

溺者 「はい, できます。」

A 「ツーマンキャリアをするので, Bさんは足を持ってください。」

B 「わかりました。救急車はすでに本部で待機しています。本部まで運んで行きましょう。」

⑪ ツーマンドラッグ開始

溺者確保: 溺者を中央に挟むように立ち, それぞれ溺者側の腕で溺者の脇をつかみ, もう一方の手で溺者の手首をつかむ。

溺者を持ち上げる: レスキューーの二人は, コミュニケーションをとりながら, 溺者を持ち上げて運ぶ。

A 「私が頭側をやります。足側をお願いします。持ち上げます。Bさん, いいですか。」

B 「OKです」

A, B 「いち, に, さん」

B 「Aさん, ××まで, こちらに向かって直進します。」

A 「了解しました。」

溺者を搬送して下ろす: 次の手当を安全かつ確実に往ける場所まで搬送したら, 向きを変えて曲がり, いったん止まる。レスキューーはお互いにコミュニケーションをとりながら溺者が長座の姿勢になるように静かに下ろす。

(質問) 溺者はどの方向に下ろす必要がありますか。

波打ち際と平行になるように。

B 「ここで降ろします。ゆっくりおろしましょう。いいですか。」

A 「了解しました。」

A, B 「いち, に, さん」

溺者を寝かせる: レスキューーは溺者の脇下から腕を抜き, 注意を払いながら左右の手を持ちかえ, 一方のレスキューーは溺者の頭を, もう一方のレスキューーは溺者の肩口を保持し, 溺者の両腕を引き支えながらゆっくりと溺者の身体を倒し, そのまま砂浜に寝かせる。

A 「Bさん。私が頭を支えますので, ゆっくり横にします。いいですか。お願いします。」

B 「了解しました。ゆっくりいきます。」

⑫安全確認

その後、溺者の様子を観察し、必要があれば、付き添いながら監視塔や本部などへ移送する。溺者は状態悪化の可能性もあるので、判断には細心の注意を払わなければならない。

A「もう大丈夫ですよ。話せますか？気分はどうですか？吐き気などありませんか？痛いところなどないですか？」

溺者「気持は悪くないです。でも、足が痛くてつらいです。」

A「足のどのあたりがどのように痛いですか？」

溺者「右足のひざから下のところ、裏側がつかばるように痛いです。あと、友達がいっしょだったんですけど。」

B「お友達は大丈夫です。こちらで休んでいます。男性の〇〇××さんですね。」

溺者「はい、そうです。よかった。」

⑬救急へ状況説明・引き渡し

待期している救急隊へ救助時の状況を正確にかつ迅速に説明する。

A「報告を始めます。20代男性、軽溺……。」

〈教材の活用法について〉

今回のミニシナリオレスキューでは、できる限り、実際の談話に近い形式で談話を作成した。さらに自然談話に含まれる要素で、互いの信頼を示す指標ともなる終助詞やフィラーも取り入れた。情報の伝え方については、簡潔に必要な情報を述べるのが第一であるが、その他に、文を最後まではっきりと発音することも促した。

実際のトレーニングでは、〈教材例1〉、〈教

材例2〉をそれぞれプリントアウトして配布し、学習を行う。適宜、用意された質問を投げかけ、状況を正確に把握しているか、またこのような発話を行う理由はなぜかを考えさせることが大切である。また、このシナリオはあくまでも例であり、他の言い方、より適切な言い方、状況によってどのように言い換えるかなどを随時考えながら、シナリオを読み進める。

〈教材例2〉については、教材を通読し、終わった時点で、シナリオレスキューの実践に入ってもよい。まず、できる限り動作を交えてロールプレイを、適宜必要に応じてシナリオを参考にしながら行い、次に、指導者が状況設定の変更、登場人物の変更（溺者の属性を20代男性から10代女性に変更する、新たに目撃者の役を加えるなど、状況を複雑化する）を行って、ロールプレイを続けることも可能であろう。

その際、コミュニケーション活動の目的は、溺者を思いやりながらも迅速に救助することを念頭におくことを強調し、そのために必要な発話は何かを習得させたい。

4. おわりに

本稿では、ライフセービングの教材作成に向けて、シミュレーションを設定したミニシナリオを作成した。今回は、「溺者と救助者」の関係に焦点を絞り、そこに一部救助者間での談話も含め、できるだけ現実に近いシナリオレスキューとした。ライフセービングの現場では、「溺者と救助者」の周りに、他の救助者、溺者の友人、一般の利用者、連携機関（消防、警察）など、様々な関係者が存在している。最初から複雑な関係を求めてしまうと混乱が生じるので、まずは最小単位の「溺者と救助者」のト

レーニングという単体のレスキューの流れを十分理解させ、その発展として、複雑な状況を設定して訓練していくという手法を選択した。

今回のパイロット教材は、最も基本の「溺者と救助者」に救助者一名を加えた、「ミニシナリオレスキュー」である。レスキューアはペアとなっているが、その際、二人はお互いを思いやりながら、息をあわせ、気持を一つにして臨まなければよいレスキューはできない。このために、コミュニケーション技術の練習は有効であると考えられる。良いコミュニケーション活動とは、他者を理解することが重要だからである。

ライフセービングのコミュニケーションでは、内容が首尾一貫していること、明確であることといった、いわゆる談話のストラテジー基礎だけでなく、有事であっても情熱を持って責務を遂行し、かつ公正で冷静に判断できるライフセーバーとしての自覚、さらにリスクやレスキューに関する知識といったものも欠かせない。

近年の研究では、大学生はSNSよりもより直接的なコミュニケーションに幸せを感じており(本多 2016)、これはFredrickson (2009) が指摘するポジティブ感情に深くかかわるものとされる(註8)。ここから、今回の指導対象であるライフセーバーの育成過程にある大学生も、直接的なやり取りの重要性を十分認識していると考えられよう。更にライフセーバーは、その活動の目的に鑑みて、こうしたポジティブ感情を持つことが、そのコミュニケーション効果向上に直結すると期待される。そこで今後は、今回作成したミニシナリオレスキューを実践の場で検証し、改良を進めるとともに、前述のような心理学の知見も踏まえながら、より多くの現場の状況に即したライフセーバーのコミュニケーション

ン能力育成のための教材を作成していくことが課題である。

注

(注1) こうした活動に向けて十分な能力をつけるため、プールや湖の救助活動に必要な知識、技術を習得する資格が設けられている。ライフセーバーの初心者向け資格としては、CPR(心肺蘇生法)資格・ウォーターライフセーバー資格(15歳以上。400mを10分以内、50mを50秒以内、潜行15m以上、立ち泳ぎ2分以上ができる泳力)・ベーシックサーフライフセーバー資格(18歳以上。400mを9分以内、50mを40秒以内、潜行20m以上、立ち泳ぎ5分以上できる泳力)などがある。また上級者向け資格としては、アドバンスサーフライフセーバー資格(19歳以上、ベーシック資格を取得後1年以上経過していること、ビーチパトロールを20日間以上経験していること。800mを14分以内、50mを35秒以内、潜行25m以上、立ち泳ぎ10分以上できる泳力)等がある。

(注2) このコースの対象者の内訳は、以下の通りとされている(データの一部を示す)。

Gender: Female67%, Male33%.

Level of previous training: Never trained 50%.

Education: Freshman34%, Sophomore26%, Junior 21%, Senior19%

Race: White81%, Black13%, Asian3%, Hispanic2% Other1%

(注3) 島崎(2015)では、以下のような例が挙げられている。

否定的な非言語コミュニケーション

選手を見下ろしながら話す・横目遣いに見る・声が小さい・背中を丸めている・視線をそらす・硬い口調で話す・表情を変えない

肯定的な非言語コミュニケーション

選手の手や肩、背中、頭に触れる・はっきり発音・にこにこ笑う・向き合いながら話す・ジェスチャーを交えて説明・視線を共有して話す・目を見て話す・うなづく・身を乗り出して話を聞く・声を出して笑う・声が大きい

(注4) 以下、西谷(2014)での教材の一部を示したい。事例の提示：今日は水曜日。ベトナム人のアインさんは、日本人上司の山田さんから「来週の月曜までに去年と今年の製品売り上げの比較のデータを出しておいて」と指示を受けました。アインさんは「はい、わかりました」と答えて自席に戻りましたが、仕事を始めようとして、はたと困ってし

まいました。どの範囲で、どの程度詳しいデータを集めて、どのような形で出力すればよいのだろうか。

1 アインさんは山田さんに質問することにします。何を質問したらよいですか。

- ・データを使う目的
- ・データの何が大切か
- ・使える前例はあるか
- ・その他

2 上記のどの質問も必要であることを明示し、それぞれ具体的な質問の仕方を例示する。

- ・データを使う目的
例「このデータは経理課に回すのですか」
- ・データの何が大事か
例「すべての製品についての数字が必要ですか」
- ・使える前例
例「何かサンプルはありますか」

3 山田さんは最初にどのような指示をすればよかったですでしょうか。

答え＝何のために、このぐらいのレベルでという具体的なアクションを指示することが重要です。具体的なゴールが示されていないとアウトプットがお互いの期待と違うものになってしまう可能性が高くなります。

4 山田さんはどうして3のような具体的な指示をしなかったのでしょうか。

答え＝世界の文化を大きく分けると、全てを言葉にしなくても、相手の意図を察し合ってなんとなく話が通じてしまうハイコンテクストな文化と、あくまで言語によるコミュニケーションを図ろうとするローコンテクストの文化があるとされます。

日本はハイコンテクストの文化で、聞き手の能力に対する期待が大きく、全てを言語化しない傾向があると言われます。「阿吽の呼吸」という言葉のその表れでしょう。

外国人に対しては追加の質問：あなたの文化はどちらに属しますか。

(注5) 日本ライフセービング協会(2008)に示された緊急時の無線連絡の例

タワー：レスキュー・レスキュー・レスキュー。こちらAタワー。現在Aタワー正面前方50メートル沖に、女性3名が溺れています。〇〇がレスキューボートで救助に向かっております。どうぞ。

本部：こちら本部。了解しました。本部から一名応援に行きます。詳細を随時お知らせください。どうぞ。

タワー：こちらAタワー。了解しました。先ほどの女性3名のうち、1名が重溺の模

様です。救急車の要請をお願いします。どうぞ。

本部：こちら本部。了解しました。

(注6) 「リーチ」から「スイム」まででは溺者に抱きつかれたりすることを防御できる余裕をもつことが重要であり、「トウ」ではレスキュー自身の体力が必要で、身体接触を伴わない方がリスク(レスキューの危険度)は少ないとされる。

(注7) 日本ライフセービング協会(2008)では、「助けてサイン」は、「片手を頭の上で大きく振る動作」で、遊泳者が沖で戻れない場合に自分で出す、または近くで溺れている人を発見した遊泳者が出すサインであるが、共通認識として広く一般に理解されているとは言えないとしている。

(注8) Fredrickson(2009)では、ポジティブ感情は、うれしい、楽しい、リラックスしたなどの一過性の気分や状態にとどまるものではなく、さらに単に気分が良いだけでもないという。そしてこれは、心理的、身体的、社会的資源を拡張することにより、思考や行動の選択肢を拡張し、身体的、知的、社会的な個人資源を作り上げ、様々な思考や行動に注意を向けさせるといったものであると指摘されている。

<参考文献一覧>

島崎崇史(2015)「健康・スポーツを支援する効果的なコミュニケーション：相手に届くメッセージの伝え方」『人間科学研究』28(2) 268-269

角田季美枝(2013)「リスク・コミュニケーションに関する教材開発と評価のためのガイドラインの紹介」『公共研究』9(1) 230-243

高橋るみ子・豊福彬文・野邊麻衣子・石本愛・野邊壮平(2016)「コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス教材の開発——ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する取組の推進——」『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』24 21-32

東海林祐子(2011)『スポーツコミュニケーション』ブックハウスHD

永井涼子(2013)「看護師談話の分析を応用した教材作成の試み——引き継ぎ報告「申し送り」を対象に——」『日本語教育方法研究会誌』20[2] 42-43

西谷まり(2014)「日本語ビジネスコミュニケーション教材の開発」『一橋大学国際教育センター紀要』5 105-112

日本ライフセービング協会(2008)『サーフライフセービング教本』大修館書店

本多朝子(2016)「大学生の日常的なポジティブイベン

- トの構成要素——大学生はSNSよりも直接的なコミュニケーションに幸せを感じる——」『東京成徳大学研究紀要——人文学部・応用心理学部——』23 103-112.
- Fredrickson, B. L. (2009) *Positivity*. London: Oneworld Publications.
- Grahn, K. (2014) "Alternative discourse in the coaching of high performance youth sport: exploring language of sustainability." *Reflective Practice*, 15: 1, 40-52.
- Page, J., Bates, V., Long, G., Dawes, P., & Tipton, M. (2011) "Beach Lifeguards: Visual Search Patterns, Detection Rates and the Influence of Experience." *Ophthalmic and Physiological Optics*, 31(3), 216-224.
- Portis, M. (1998) "Stop, Drop, and Roll: A Lifesaving Physical Education Lesson." *Strategies*, 12: 1, 11-12.
- Kandakai, T. L. & Keith, A. K. C. (1999) "Perceived Self-Efficiency in Performing Lifesaving Skills: An Assessment of the American Red Cross's Responding to Emergencies Course." *Journal of Health Education*, 30: 4, 235-241.
- 本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究C）（26350729）「我が国のライフセーバー育成に向けたコミュニケーション教育の方法開発とその実践」（研究代表者 立川和美）の一部です。